

コールリッジの変貌？

小 谷 春 夫

I. コールリッジは‘The Ancient Mariner’ ‘Christabel’ ‘Kubla Khan’という英文学史上の不朽の名詩を創作した後、1年ドイツのGöttingen大学に留学した。1799年7月Stoweyの家に帰る。Southeyと共に旅行したり、Morning Postに寄稿したり⁽¹⁾、化学者Humphry Davyと親交を結びその実験を観察したり⁽²⁾、Wordsworth兄妹と湖畔地方へ旅行したりする⁽³⁾。Sara Hutchinsonとの出会いは詩心を醒まして名詩‘Love’を書くが、既に不和となり始めた妻との間の夾雑音となるのみ。1800年6月Wordsworthの後を追ひ湖畔地方に住居を定む。自然に親しむが持病リュウマチを悪化させ、アヘンを常用する。1803年8月Wordsworth兄妹とScotland旅行をするが、病を更に悪化させ、1804年4月療養を目的としてMalta島へ行く⁽⁴⁾、Governor Sir Alexander Ballの仕事を手伝う。健康回復後地中海を旅し、Romeなど訪問し⁽⁵⁾、1806年8月にLondonに帰る。1809年1月からThe Friendを自ら編集し、翌年3月まで27号出版発行する。その間Courierへ寄稿したりする。

しかし、留学以前に創作した詩を凌駕する新しい詩は作られなかった。むしろ哲学者、社会批評家、文芸評論家として働くようになる。The Ancient Mariner等の詩のあまりにも傑出していた為、其の後の生涯をみるとき、コールリッジを挫折したとみるか、変貌したとするか、或いは成長熟成したと考えるか、いずれにしてもその変化の大きさの故に多くの人にとって、ドイツより帰国後のコールリッジは大きな謎であり、評価を異にする。

II. 現在コールリッジ研究は非常に多岐にわたっているが盛んである。この30年間程の間に出版もしくは再版されたコールリッジについての研究成果を挙げ

てみればそれは明らかである。

The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge, これは Kathleen Coburn を総編集責任者として、Princeton University Pressにより、1967年から順次刊行されている。全部で16主題に分かれ内9主題が出版されている。1主題で3巻（1巻400頁以上）になるもの、例えばEssays on His Timesのようなものがあり、全部完成された暁には20巻は越えるであろう。

The Collected Letters of S.T.Coleridge (6 vols.) ed E.L.Griggs 1956-71

The Notebooks of S.T.Coleridge.(3 vols.) ed. K.Coburn 1957-73

以上はコールリッジ著作全集に克明な註を加えて再版されたものであるが、以下は筆者の知る限りで集めたコールリッジ関係の研究書である。それを出版年代順に著者もしくは編者と書名を列挙してみよう。

1953 R.J.White, Political Tracks of Wordsworth, Coleridge and Shelley

'55 R.B.Brinkley, Coleridge on the Seventeenth Century

'59 J.Colmer, Coleridge Critic of Society

'61 J.D.Boulger, Coleridge as Religious Thinker

C.R.Woodring, Politics in the Poetry of Coleridge

'66 D.P.Calleo, Coleridge and the Idea of the Modern State

J.L.Harney, The German Influence on S.T.Coleridge

'67 W.Walsh, Coleridge

'69 J.R.Barth, Coleridge and Christian Doctrine

R.Haven, Patterns of Consciousness

J.R.deJ, Jackson. Method and Imagination in Coleridge's Criticism

T.McFarland, Coleridge and the Pantheist Tradition

G.N.G.Orsine, Coleridge and German Idealism

'70 J.B.Beer, Coleridge the Visionary

A.S.Byatt, Wordsworth and Coleridge in their Time

JH.Murhead, Coleridge as Philosopher

J.R.deJ.Jackson, Coleridge The Critical Heritage

'71 B.L.Brett, S.T.Coleridge

N.Fruman, Coleridge The Damaged Archangel

- '71 B.M.G.Reardon, From Coleridge to Gore
- '72 O.Barfield, What Coleridge thought
 A.Grant, A Preface to Coleridge
 B.Willey, S.T.Coleridge
- '73 A.Hayer, A Vayage In Vain
- '74 J.Beer, Coleridge Variety
 K.Coburn, The Self-Concious Imagination
 A.J.Harding, Coleridge and the Idea of Love
- '75 R.Parker, Coleridge Meditative Art
- '76 S.Prickett, Romanticism and Religion
- '77 J.R.Barth, Symbolic Imagination
 J.B.Beer, Coleridge's Poetic Intelligence
 K.Coburn, In Pursuit of Coleridge
 L.S.Lockridge, Coleridge the Moralist
- '78 J.Colmer, Coleridge to Catch-22
 B.Knights, The Idea of Clerisy in nineteenth Century
 J.S.Hill, Imagination in Coleridge
 W.F.Kennedy, Humanist versus Economist
- '79 W.B.Crowford, Reading Coleridge
 K.Everest, Coleridge's Secret Ministry
 E.Kessler, Coleridge's Metaphors of Being
- '80 S.Prickett, Coleridge and Wordsworth
 M.J.Swistecka, The Idea of the Symbol
 K.Wheeler, Sources, processes and methods in Coleridge's Biographia Literaria
- '81 J.Christensen, Coleridge's Blssed Machine of Language
 T.H.Levere, Poetry realized in Nature
 E.R.Marks, Coleridge on the Language of Verse
 D.Sultana, New Approach to Coleridge
 K.Wheeler, The Creative Mind in Coleridge's Poetry

'82 T.Corrigan, Coleridge, Language and Criticism

T.Corrigan, Coleridge, Language and Criticism

J.P.Mileur, Vision and Revision

'83 P.Hamilton, Coleridge's Poetics

詩人、文芸批評家、哲学者特にドイツ観念論者、社会批評家、政治批評家、経済批評家、言語学者、宗教思想家、科学批評家等々実に多面的にコールリッジが論ぜられている。この中詩人としてのコールリッジはドイツ留学以前に既に完成しており、特にイギリスロマン主義の先達として周知され、その事についての研究は相変わらず盛んであるが、その後の思想について最近特に注目を集めてきている。筆者は先に啓蒙主義、ロマン主義、キリスト教という文を草し、その中で18世紀がまさに啓蒙主義の下、産業革命、アメリカ独立、フランス革命をともなって西欧人の考えならびに生活様式を変えた時代であることを記し、その時代の変革にきびしい目をむけた人こそコールリッジであることを述べたが、ロマン主義詩人として評価されるだけでその他の面が一般に評価されない点を遺憾と考える。ただ微力な筆者は上記の文献でみられる諸成果を総括するまでにいたっていない。幸い日本の学者でこの点に深い洞察を加えている方々があるので、その論点をまとめ今後の足掛りとするつもりで小論を草すのみ。

Ⅲ. コールリッジがドイツ留学後詩心を喪失した事について、自ら書簡や詩でもって著しているものがあり、よく引用されるものがある。

「コールリッジが批評家になろうという意図を初めて表明したのは1800年9月のことであった。詩人としてクリスタベルの第二部を書きつづけることに絶望した彼は『私は全く詩作をすてました。ワーズワス君にはいとも高貴な深遠な詩の創作をゆだね、サウジィ君には、一層喜ばしく人気があって、しかも気品のある詩の創作を任せて、私自身には、これらの詩人たちの作品を他人に感得させ理解させるという光栄ある仕事をとっておきましょう』⁽⁶⁾」。

「このように夢と観念の国を故里として現実と自然に直接の根をもたない彼の詩魂は、夜空にひらく花火のようにその華麗な光と熱に自らを燃焼させたあとは、どこにも新しい生命の源をもたなかった。かくて1801年の春には早くも

『私の内なる詩人は死んだ。私の想像力は……真鍮の燭台の円い上端にある冷い蠟燭の芯のように、それがかって焔に包まれていた事を思い起こさせる脂の匂いさえもない』と友人に書き送り、越えて1802年にはDejection:an Odeを書いて詩心の喪失を嘆かざるを得なかった⁽⁷⁾』。

このDejectionについては次の考えもある。

「……夫婦の不和を述べた手紙のうちで『私は外遊を決意しています』といっていることから見て、ColeridgeのMalta島行きは単なる健康のためだけではないことを知るのである。又その手紙の中で Coleridge の転機を述べた有名な詩Dejection:an Odeの一節が引用してあることは極めて意義深いことである。すなわち、Coleridgeの詩心の喪失は家庭の悲劇に原因があると Coleridge 自身考えていたということが出来るのである」と⁽⁸⁾。

ここでDejection:an Ode 8連139行の第6連につき工藤好美の解説を通して学んでみる。

「悲しめる者は自然のうちに憂いを見、楽しめるものは同じ自然のうちに喜びを見いだす、そして喜びのみが自然を我等に結婚せしめ、持参金としてわれらの心に新しき天と地とをもたらず。この反省は彼を駆って、憂いを知らぬ、そして憂いすら喜びの原因となり得た生涯の春の季節をふりかえらせた。

There was a time when, though my path was rough,

This joy within me dallied with distress,

And all misfortunes were but as the stuff

Whence Fancy made me dreams of happiness:

For hope grew round me, like the twining vine,

And fruits, and foliage, not my own, seemed mine.

かつてはわが道峻しけれども、

内なるよろこび悲痛とたわむれ、

ふしあわせはすべて想像の力が、

しあわせの夢つくる材料なりき。

望みは蔓草のごとわれをとりまき、

わがものならぬ実や葉もわがものとみえぬ。

しかし今内外の災厄は彼を地上にうちのめし、彼がもと自然から授けられた最

も尊い能力-「ものを形づくる想像の霊」-を休止させた。それでは何が彼をこのような窮地に追いこんだのであろうか、「病気と或る他のより悪い苦悩が最初私を無理に純粹な形而上学にはいらせた。私は生れつき私のうちにもっと詩人の要素を持っています」(William Sothebyへの手紙, 1803年7月)と彼はこの詩を封入して一人の友に送った手紙のなかに書いている。そしてここに、おそらくこれまで何人も試みたことのない複雑な心理学上の問題に対する説明の詩的表現がある。

For not to think of what I needs must feel,
But to be still and patient, all I can;
And haply by abstruse research to steal
From my own nature all the natural man —
This was my sole resource, my only plan:
Till that which suits a part infects the whole,
And now is almost grown the habit of my soul.

(王藤好美はこれを訳すことを躊躇し、欄外註に大意として付記するのみ。) 彼は今最後の努力をもって「実在の黒き悪夢」-彼の心に毒蛇のごとくからまれる無益な思想から遁れて、自然の声に聞こうとする。しかし外を吹く風も彼の内心の暗黒と狂乱とに同感するもののごとく、吠え、たけり、或は消えいり、ふたたび砂をまいて起る。そして詩のこの部分は作者の心が外界の事象と完全に一致し、天地の蕭々たる氣息にまじってさまよい泣く裸の霊の声が、情操とともに変化する微妙な韻律によって写され、たぐいない絶唱をかたちづ⁽⁹⁾くっている。」

喪心の賦と訳されるこの詩は難解である。王藤好美はコールリッジの詩心喪失をこの詩だけに見ようとしな⁽⁹⁾いところがある。むしろ1806年コールリッジがマルタ島から帰国し、ワーズワスの家に身を寄せた時に詠んだ詩To a gentlemanに見ている。そこでワーズワスからPrelude草稿を詠んで聞かされる。それを聞いてコールリッジは、ワーズワスと共に詩作に打ち込んだ日々を思い、尚詩作に生きる友と自己の傷心の現状とを較べ、「彼の詩人としての自己に対する挽歌」としてあらわしたという。

And all which I had culled in wood-walks wild,

And all which patient toil had reared, and all,
Commune with thee had opened out —but flowers
Strewed on my corse, and borne upon my bier,
In the same coffin, for the self-same grave!

(大意。森の小径にわがすみしすべてのもの、久しく労して育てしすべてのもの、御身との交りによりて咲きいでしすべてのもの——されどすべてわがなきがらのうえに撒かれて棺台に運ばれ、同じきひつぎに入れて、同じ墓に埋められる花。註御身とはWordsworthのこと。)⁽¹⁰⁾

もっとも喪心の賦については、岡本昌夫による別の解決がある。

「この詩の細部については色々議論もあるであろうが、(ここで欄外註として、この詩についてMarshall SutherのThe Dark Night of S.T.Coleridge, New York, 1960が詳細な論評を行っている。の説明がある)。この詩に於てColeridgeは自己の詩心の喪失をなげき、生れながらに持つ形成的な精神と想像力の凋落をなげていることは明らかであり、それに代って「部分に適するもの」、即ち抽象的思考が、ただ一つのなぐさめとなるばかりであると告げるのである。哲学的思索によって人間の本質を思考することがColeridgeの唯一つのなぐさめとなりつつあるというのである。」⁽¹¹⁾

以上がコールリッジの詩心の喪失について彼自身の言葉を用いながら論ぜられるところである。これらの詩文を通じて、コールリッジの中に何かの変化がおきた。それを特定の日時なり、特定の事件と係わらせることはできないが、ドイツ留学後の数年の間のことである。

詩人としてのみのコールリッジを見るならば、その後の彼の労作も「この廃人に近かった詩人が肉声を語っていたと思われるときでさえ、彼を大きく包んでいたのは過ぎ去った文明の残像、いいかえれば“様式”という名の規矩であったと信じられる」外ないかもしれない。⁽¹²⁾

しかし他方、コールリッジ自身、その詩老人夫行が1798年に出版されてより約20年、推敲に推敲を加えた経過を真剣に問う研究者もあり、英国もしくは西
欧社会の思想の変遷と係わらせた彼の成長を見ることもできるのである。⁽¹³⁾

ここで筆者はコールリッジ自身の本質的なものを哲学的もしくはキリスト教的人間観の基本原理の追求におき、近代という多元的重層的複合性の中でどの

ように係わらせていったかを問題とする。その一つとして、コールリッジのドイツ留学後の10年間は非常に興味のある問題を提示している。

IV、工藤好美は「詩、或は文芸と哲学とは本来疎遠なもの、或は両立しがたいものであろうか」と問い、「聖なる哲学には愚かなる人々の想像するように晦渋なものでなく、アポロンの琵琶のごとく音楽的なものであると言った昔の人の言葉（MiltonのComus II 476-479）を引くまでもなく、コールリッジ自身の経験がこれら二つのものは同じ一つの心のはたらきから生れ、それが彼の生涯の異なった時期に異なった形式で現れたにすぎないことを示している」とい⁽¹⁴⁾う。

加藤龍太郎は先に「コールリッジの文学論」を著して、その二つの時期の連続性を論じ、更に近著「コールリッジの言語哲学」でそれを補足敷衍している。非常に大切な点を明瞭にしているので、まずその論点を記す。

「コールリッジの文学論」第5章に二律背反の成長という主題が掲げられ、頭悩と心情の葛藤という副題がつけられている。コールリッジがその父から受け継いだものは「その職業でもなければ、遺産でもなくて、まさに超驗主義と神秘主義と理想主義であり、同時にこれらの心の傾向が直面しなければならなかった当時の合理主義と経験主義に対する対立と矛盾の運命であつた」とい⁽¹⁵⁾う。

そして「1787年彼が15才のころ、兄のルークがロンドン病院の医師となるや否や、彼は『医師の徒弟となることを熱望して、医学に関する英語やラテン語の書物はもとより、ギリシヤ語の書物を絶えずよんで、ブランチャードのラテン語辞典をほとんど暗記したほどであつた。』そして彼が『ヴォルテールの哲学辞典を読み終わってからは、無宗教者のようにふるまった』『しかし』と彼は後に弁明する、『私の無宗教のようなみせかけは決して私の心情には手をつけなかつた』この言葉は明らかに一つの重大な事からを指示する。すなわち、当時彼の知性が追い求めていたものと、彼の天資の心情が要求していたものとの間の対立と背反でもある。彼の知性は、当時の時代精神の影響と、彼の鋭い感覚を通じて力強い呼び出しをかける外なる物の世界の誘引とによって、ひたむきに現象の世界に真理を求めて働き出ようとした。しかるに、彼の生得の心情は逆に内に籠って自らの夢をいつくしみ、その夢の中に魂の眞実を見、その権

威をうち立てようとした。ようやくに明瞭な物心のつく少年の目に、コールリッジは既にこのような内的な矛盾と対立をもったのである。この知性と心情の葛藤 (Head-and-Heart struggle) をいかに解決してゆくか、ここにコールリッジのあらゆる思想の展開の根源が見出されるであろう。⁽¹⁶⁾」

この点を起点として次のハートリ (David Hartley) へのコールリッジの傾倒も説明される。ハートリとは脳および神経の解剖学的研究に基づいて連想心理学を立て、すべての心的活動を、時間的接触による連想の見地から考察した医師・心理学者とされる (岩波西洋人名辞典) が、加藤龍太郎は「ハートリの学説において矛盾しながらも一つの体系にまとめ上げられたもの (即ち唯物論的連想説とキリスト教信仰) が、コールリッジの精神にあっては不断の葛藤と対立において所有されていた」とする。⁽¹⁷⁾

B. ウイリーも同じ意見をもつ。即ち「ハートリは必然論者であると同時にキリスト教徒であり、唯物論者であるとともに宗教的でもあった。そして1796年におけるコールリッジの思想的立場と近かったので、コールリッジがハートリに対して感じていた宗敬の念も理解できよう」。⁽¹⁸⁾

矛盾のまま受け入れるとは、時に分裂し、時に妥協することであろう。妥協した時には具体的客観的成果をもってあらわす。加藤龍太郎はいう「彼の内的分裂と葛藤の根源にある問題は物と心との二律背反がひきおこす認識論の問題であったから、かってこの内的分裂が一時的な妥協をもった時、その時期に彼詩魂は妖麗な花と咲き出て稀有な美しい実を結んだ」と。⁽¹⁹⁾ コールリッジの Annus Mirabilis といわれ、名詩を創作した時期であった。

コールリッジがドイツ留学中にどのようにカントの哲学になじんだかは不明である。むしろ多くの学者はこれに懐疑的である。しかし、英国へ帰国するときカントの哲学書を購入して持ち帰ったことは、Wedgwood への書簡から知られている。何時コールリッジがカント哲学を研究しだしたかは、興味ある問題であるがここでは省略する。⁽²⁰⁾ 加藤龍太郎の結論のみ引用すれば次の通り。

「我々はコールリッジが初めてマカントに関するなんらかの知識を持ち始めたのは1795年から始まるベドゥズ (Thomas Beddoes) との交際を通じてであり、やがてみずから求めて真剣にカント研究を開始した時期は1800年から1801年の春にかけてであることを知り得た」。これが正しいとすれば、先にコール

リッジが詩心の喪失を歎くゴドウィンへの手紙と同一時期であることを知る。そこで加藤龍太郎の論旨が一貫してくる。すなわち、「彼が真面目にカント研究を開始した時期は、彼の内的葛藤——頭脳と心情の抗争——がかつてもった幸せな妥協から再び破端して、観念と感覚、心と物との二律反がきびしく彼の思索を圧迫していた時期であったことも既に明らかになし得た。（喪失の賦にみられる難解さが示す——筆者所見）、したがって、彼がカント学説の中において最も大きな魅力を感じたものは、人間の知性の批判であり、特にカントのなした悟性の限界に関する説教であったことも確実である。この批判哲学の立場こそコールリッジにとって、彼の心を経験主義と必然論の強い魅力から解放して、その生得的な観念論の勝利をかなでるといふ彼自身に固有な目的のために唯一の武器として必要なものであった。そしてこれはカント以前のどの哲学体系も彼に与えることができなかつたものであった」⁽²²⁾。

カント哲学によって、理性と悟性の弁別を教えられ、それを書簡、*The Friend*, *Omniana* への寄稿、*The Statesman's Manual*, *Biographia Literaria*, 講演、*Aids to Reflection*, *On the Constitution of the Church and State* へとコールリッジの哲学基盤を確立し、それをもって批判家としての活動を進めていく。加藤龍太郎の特に目的とするところにはコールリッジのシェイクスピア批判の特色を明らかにするところである。「コールリッジがなしたことは、一方においては、従来の批評家たちの沙翁非難の立場、すなわち, Rymer, Pepys, Dennis, Gildon などのごとく沙翁における古典的教養の欠除とそれからの結果する沙翁劇の不規則性と表現技巧の粗野を難ずる立場に対しては、機械的な規則性 (Mechanical regularity) と有機的形粗 (organic form) との弁別を説くことによって徹底的に論破した。それと同時に他方においては、沙翁弁護の立場、すなわち Dryden, Pope, Tate, Addison 等がなしたように沙翁が「自然」の子であるという有名な弁護に対しても、所産的自然 (*natura naturata*) と能産的自然 (*natura naturans*) との区別をもって、彼等の議論の甘さと未熟さを衝いて余すところがなかつた。このように非難と弁護の両方の立場を共に等しく批判し、両者を併せて否定することが出来る一層高次の立場をとり得たということが——これが沙翁批評におけるいわゆるコペルニカスの転回と言われるものであるが——コールリッジの批評活動の最もすぐれた功績のひとつであった」⁽²³⁾ 所し

てこれこそ二律背反の紆余曲折があったけれども、コールリッジが父から受け継いで終始一貫発展させてきたものとするのである。

V. しかしカントだけがドイツ留学後の苦悩を克服するものであったか、今一つの重要な示唆も欠かすことは出来ない。それは岡本昌夫の指摘するところである。「コールリッジの神学に対する造詣は極めて深いものがあり、初期のFathersの書きものからJohannes S Erigena (or Eriugena) (? 810-? 880), St. Anselm (1033-1109), Thomas Aquinas (1224/5-1274)などの中世神学の主な人々、またイギリスではWilliam Occam, Duns Scotusなど、極めて広範囲に色々の書物を愛読した。初期の教父ではOrigen, Jerome, Augustineを‘three great fathers in respect of theology’⁽²⁴⁾とって尊敬したが、殊に St. Augustineに心酔し、晩年には、しばしばその人について語り、またその文章を引用したりした。Thomas Aquinasに関する関心も深く、Notebooksの中に幾多の引用がある他、Biographia Literariaその他にも言及を見出すことは容易である。ColeridgeがいつごろからAquinasやErigenaを読んだかをうかがって見るならば、1801年7月24日ColeridgeはDurham Cathedralから1612年版のAquinasの全集(Opera Omnia)を借り出し8月24日にそれを返したという記録がある。このことからすればColeridgeはドイツから帰朝したころ、こういうSchoolmanの書物に熱中したと考えられる。また1803年7月2日Robert Southyへの手紙の中で「自分はスコウタスとエリゲナから大きな喜びと教訓を得た」といっているところから察すれば、1803年頃Erigenaを読んでいたことも察せられる⁽²⁴⁾。

以上の引用はコールリッジが苦悩の間、カント哲学のみでなくヘブライ的思惟というキリスト教神学を学び、神を無限なる絶対者とする思想を受けていたということである。コールリッジの想像力説理解にこのことを欠かすことはできない。加藤龍太郎も近著の中で「コールリッジは彼独自の理性論を展開する中で、ついに神の本質を最高理性と規定するところまで到達した」という言葉をつけ加えているのである。⁽²⁵⁾

VI. 一般にいわれている詩心の喪失という時期は、コールリッジのすべてが失われていったのではなく、実に彼の思想的発展の重要な段階であった。彼は確

かに苦悩の中にあった。しかし、彼はその苦悩の奥にあるものを普遍的現野をもって洞察したとき、強固な基盤を確立し、近代人が当面する多種多様の問題を解決する道を示したのである。

註

- 1) J.Colmer, Coleridge Critic of Society, Oxford, 1959. p.53f
- 2) 小黒和子, コウルリッジと科学, 渡辺正雄編「イギリス文学における科学思想」, 研究社, 1983. p.216以下
T.H.Levere, Poety realized in nature. Cambridge, 1981この本の副題は Samuel Taylor Coleridge and early nineteenth scieneeでColeridgeと科学者との交友関係からその著書にみられる科学思想をまとめている。
- 3) 岡本昌夫, ワーズワス, コールリッジとその周辺, 研究社, 1984, p.107以下
- 4) A.Hayter A Voyage in Vain. London 1773,
- 5) D.Sultama, S.T.C. in Malta and Italy, 1969, Oxford.
- 6) 加藤龍太郎, コウルリッジの文学論, 研究社 1961, p.150以下
同 コウルリッジの言語哲学, 荒竹出版, 1981, p.38
尚引用書簡はCollected Letters p.623より
- 7) 前掲書 p.267又p.81にはこの喪失は頭脳と心情の要求の葛藤によるとされる。
- 8) 岡本昌夫, コールリッジ評伝と研究, p.71 あぼろん社, 1965,
- 9) 工藤好美, コウルリヂ研究, pp.43~45 岩波書店, 1931,
- 10) 前掲書, pp.47~49
- 11) 岡本昌夫, コールリッジ評伝と研究, pp.71~72
- 12) 磯田光一, イギリス・ロマン派詩人, 河出新社, 1979, p.150
- 13) 加納秀夫, '老水夫の歌'の幻想性について, 英国ロマン派の詩と想像力, 大修館, 1978, pp.49~72
和泉敬子, 'S.T.コールリッジ'遙かなるものへの憧憬, 笠間書院, 1982, pp.62~83
- 14) 工藤好美, 前掲書, p.52
- 15) 加藤龍太郎, コウルリッジの文学論, p.63
- 16) 前掲書, pp.68~69
- 17) 前掲書, p.72
- 18) バジル・ウィリー著, 三田博雄外訳, 十八世紀の自然思想, みすず書房, p.152
Basil Willey. The Eighteenth Century Background, Penguin 1972, p.134
- 19) 加藤龍太郎, コウルリッジの文学論, p.80
- 20) 前掲書, 第6章コウルリッジとカント, pp.82~106
岡本昌夫, 評伝, p.79以下

- “ 想像力, p.152以下
- “ ワーズワス・コウルリッジとその周辺, p.93以下
- 21) 加藤籠太郎, 前掲書, p.103
- 22) 前掲書, pp.103~104
- 23) 前掲書, pp.207~271
- 24) 岡本昌夫, 想像力説の研究, 南雲堂, 1967, pp.92~93
- 25) 加藤籠太郎, コウルリッジの言語哲学, p.85